



## 王であるキリスト (マタイ 25:31-46)

最も小さな者に駆け寄り、癒す共同体に

王であるキリストの祭日を迎えました。典礼暦を振り返りながら、今年の典礼暦、どのようにキリストを王として認め、受け入れてきたか確かめることにしましょう。キリストを王と認める具体的な行動は「最も小さな者のためにどんな行動をしたか」を問うことでもあります。

恥を忍んで逃がした魚の話をしてします。浜串漁港からまっすぐ700mほど沖に出るとキジハタやアコウが釣れるのですが、ついこの前ここで大きな魚をかけた。直前に1.5kgの鯛を上げていたので、ドラッグ調整は問題ないはずだったのですが、ジャーっと音を立てたまま糸が出て行き、リーダーが瀬に当たったのか、あっという間にサヨナラでした。

この魚は針を口に差したまま今も泳いでいるはずですが。針はケイムラ真鯛鉤のSサイズです。オサダの釣具コーナーのレジ寄り、いちばん右端に並んでいた針です。もし、この針を2本口にくわえた魚を釣り上げましたら、それはわたしが一度かけた魚です。ぜひわたしのところに持ってきてください。

では典礼暦を振り返りながら、最も小さな者のために続けてきた行動を思い起こしてみましょ。教会の暦である典礼暦は、待降節から始まります。待降節の準備を経て、わたしたちは救い主イエス・キリストの誕生を喜び合います。待降節と降誕節の中で、わたしたちは「最も小さな者」のために一つのことを欠かさず実行しています。上五島の中心部にある商業施設の周辺で行う「街頭募金」と、クリスマス当日に行う「クリスマス募金」です。

特に街頭募金は、時には寒さ厳しい中で、その年にさまざまな災害に遭った被災者のために全くのボランティアで呼びかけをしています。この募金は確実に、最も小さい人々を助ける力になります。

償いの季節である四旬節には、カリタスジャパンの呼びかけに応じて「四旬節愛の献金」を実施しています。これは自分たちの生活の中から、四旬節の犠牲の意味も含めて、それぞれが可能な範囲でおさげをするものです。この献金も、日本全体で集められてたくさんの方々に充てられています。

キリストの勝利をたたえる復活節・年間を通しては、たとえば長崎教区では女性部のいのちの募金や、教区全体で取り組む一菜募金などが、最も小さな人々の支援のために活かされています。ここまでは、募金や献金を通しての最も小さな人々に対する配慮でした。

今年長崎教区は、大きな方針を立てようとしています。それは教区シノドスでまとめようとしている提言案です。来月発行される長崎教区の教区報「カトリック教報 12月号」に、現時点でまとめられた最終提言案の全文が掲載されています。その中で「教会から遠ざかっている、また遠ざけられている兄弟姉妹への配慮」を第一の課題として掲げ、共に連れ立って『父の家に帰ろう』と呼びかけています。長崎教区は「『最

も小さな者』とは教会から遠ざかっている人々、教会から遠ざけられている人々である」という結論にたどり着いたわけです。

ここで福音朗読に目を留めてみたいと思います。すべての民族を裁く王として来られるイエスは、右側にいる人たちに言います。「さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。」(25・34-36)

イエスは王座にどっかり座って最も小さな者に意識が向かない王ではありません。最も小さな者が叫びをあげれば、飛んで行ってその叫びに耳を傾け、癒す王です。長崎教区民もそうでなければならぬと、今年の教区シノドスで方針を決めたわけです。

共に連れ立って「父の家に帰る」その道筋として3つの具体策が示されました。「①司教・司祭・修道者・信徒の回心と霊的養成②祈りと信仰教育を再興し、カテキスタ養成、司祭・修道者召命に力を注ぐ③よき隣人として、傷ついた人たちを癒やす教会共同体であること」です。

とくに3つ目の項目「よき隣人として、傷ついた人たちを癒やす教会共同体であること」は、今週の福音朗読の呼びかけと呼応しています。「最も小さな者」を心にかけて、その人々にとって癒しとなることが長崎教区の教会共同体の歩むべき道になります。イエスが最も小さな者を見てそのもとに駆け寄ったように、わたしたちも同じ生き方を求められているのです。

福音朗読の中に登場する王は左側にいる人たちに言います。「呪われた者ども、わたしから離れ去り、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせず、のどが渴いたときに飲ませず、旅をしていたときに宿を貸さず、裸のときに着せず、病気のとき、牢にいたときに、訪ねてくれなかったからだ。」(25・41-43)

たとえば長崎教区の司祭たちは、「最も小さな者」の痛みに関心でなければならぬ立場にあります。それなのにこれまで鈍感であったことを率直に認め、ゆるしを願わなければなりません。今まで声も出さずに司祭の鈍感さを忍耐し、自分の痛みをこらえていたかもしれません。

過ちのゆるしを請い、再び司祭たちが最も小さい人々に敏感になり、教区民みなで最も小さな者をイエス御自身と受け止めてお世話する。そのような教区に新しい典礼暦年から歩み出すことができるように、ミサの中で恵みを願いたいと思います。